

戦時下の文学 〈その七〉

安 永 武 人

四 文学の転向（つづき）

IV 和田伝のばあい

1

早稲田大学仏文科を一九二三（大正十二）年に卒業した和田伝は、同年『早稲田文学』七月号に処女作「山の奥へ」を発表したのを手はじめに、「藤森成吉論」「仏蘭西における農民文芸」「土地と人々の物語」「最後の墓」などを東京在住中に執筆し、一九三二（昭和七）年、神奈川県愛甲郡南毛利村に地主の長男として帰郷し、その翌々年から農民文学の作家として本格的な活動にはいることになる。

一九三四（昭和九）年の「村の次男」^①と「一町三反」^②は、和田伝

戦時下の文学へその七

が、かれの農民文学の基礎をきずいた作品であるといえよう。

「村の次男」は題名が示すように、当時の農村の深刻な次男三男問題がとりあげられている。あらたに土地を取得することが困難な立地条件と土地制度に制約された農村において、次・三男の前途には、現役入隊した軍隊で再役志願をして下士官になり、その恩給をもとでに自立するか、うまく養子口をみつめるかしか、生きてゆく方法がなかった。信平は、叔父の巳之吉が元・下士官としてうける年額三〇〇円の恩給をもとに、村で精米製粉業をいとなんで成功しているのを見て、軍隊に唯一の活路をみいだそうとしていたが、甲種合格であったにもかかわらず、籤のがれで兵役免除となり、その希望をたたれてしまう。本家の次郎は小作料を怠納している田をみつけてきては、地主にかけあって、その怠納分を「権利金」として自分がかきうけ、貧農から田をとりあげて持ち田をふやす方法をとっ

ている。信平もすめられて市川佐市の怠納田に目をつけるが、妻をなくし子だくさんの佐市から「飼料のカナダ麦の芋粥」までも奪いとる結果になることが予想されると、次郎のように非情にされない。ちょうどそのとき、叔父・巳之吉の長男で再役志願をしていた数男が、中国大陸の熱河で戦死した。この戦死は一族にあらたな波紋をおこす。巳之吉が養子をむかえねばならない境遇になり、信平と次郎が有力な候補者として一族の関心をあつめたからである。ことに信平の母親は熱心で巳之吉かたに日参するが、結局、小作田をもっている次郎に巳之吉の心が傾き、信平はこの第二の活路も自分のものにする事ができなかった。

世界恐慌のおおりをうけて一九三〇（昭和五）年以來、あいつぐ農業恐慌^⑧と、都会に失業者があふれ、近代産業が労働力として農村の次・三男を吸収しなくなったこの段階では、あらたに開墾する土地がないかぎり、小作料の怠納や死亡というような人の不幸にさえもつけこまなければ、次・三男の生きる道のない農村のきびしい現実を、和田伝は克明に描きだしている。

一千万石の過剰米をかかへて米穀統制法の作付反別法のとつて談議して一方に、餓食児童は相変らず村にいつばいだ。おれたちは米をつくる仕事が仕事だが米が食へねえで麦や芋を食つたらあ。佐市の餓鬼から飼料のカナダ麦の芋粥までひつたくらなき

や、こつちが生きてゆかれねえといふのに、田地だけでもまだ四百万町歩の可耕面積に雑木がしやアしやアと茂つてゐらあ。…おい！不人情なのは誰だ？

という次郎の信平に語る憤懣は、政府の農業政策へのいちおうの批判をふくみながら、それ以上には進展せず、

信ちゃん、おれだつてね、好きで怠納さがしをして田を手に入れたいと血眼になつてるんぢやねえよ。だがさうしなければ生きてゆかれねえぢやねえか？……ぢや、どうすれやいいんだ？

というところに終息してしまうのだ。自分が生きてゆくためには、他人の不幸などにかまっていられない、むしろその悲劇につけこんでも生きねばならぬという論理が、農村のきびしい現実をまえにして、うごかしがたい前提として対置されている。袋小路のなかでのせめぎあいには生きる道がない、閉鎖的農村の姿を描いている作者もまた、日本の政治、ことに農政の欠陥にいちおう眼をむけていながら、それへさらに肉迫する姿勢は示さず、農村の既成の条件に密着して、農民の生きざまを模索するにとどまっている。したがって作者の関心は、主として第一には古くからの序列にしばらくは農村での発言権獲得のむずかしさ、それを獲得するための先祖伝来の財産の確保、第二には農民の苛酷な労働の実態、第三には農村における人間関係の複雑な諸相などの描写にむかわざるをえない。第

一の系列の作品として「一町三反」「新しい血」「屋敷」「村の席次」などがあり、第二には「深い墓」「最後の墓」があげられ、第三には「村の次男」「急曲線」がある。これらの諸作品のうち一九二九（昭和四）年執筆の「最後の墓」をのぞけば、ほかは一九三四（昭和九）年の執筆がほとんどであり、わずかに「新しい血」「屋敷」がその翌年の作品であることをみれば、この時期の和田の関心がどこに集中していたかはあきらかであろう。これらの作品が『平野の人々』と題して一冊にまとめられたのは、一九三六（昭和十一年）であった。

この作品集における最大の特徴は、きわめてものわかりのよい地主が登場することであろう。ものわかりがよいうえに、気のよい、温情にみちた地主たちというべきである。伊藤永之介の『梟』^⑤にでてくる六兵衛のような、苛斂誅求をこととする地主はひとりもでてこないのが、これら和田作品のひとつの特徴である。小作料をながらもく意納しているのに、その小作人が泣きつく、その田をほかの小作人にまわすことのできない「村の次男」の地主・△二の主人もそのひとりである。

田を取上げるなあわしはいやでな。わしの代になつてから、まだ田を取上げたことは一度もないんだ。わしは強い奴にや負けんが弱い奴にや勝てんでな。それで弱る。な、その田をつくりたいけり

戦時下の文学へその七

や佐市にはお前が言へ。

意納している佐市から、自分の手では田をとりあげることのできない地主である。なぜ、こういう現実ばなれをした地主が、かれの作品には登場してくるのか。農民の惨状を目前にして、それに同情を禁じえない若い知識人・地主として、農村の所与条件のなかで小作人の苦痛をいくらかでも緩和しようとするれば、自分と出自を同じくする作中の地主を善意の人にしたてあげるのが、かれの主観的善意をも満足させるし、作品のなかで地主作家として農村の現実に決定的な対決をしいられることも回避できるからではなからうか。つまり和田は農村における自己の立場を否定的にとらえることをおし、農村の土地制度の矛盾に文学的格闘をいどむという方向ではなく、逆に自己弁護の方向に傾いた、それだけ作品はリアリティを失わねばならなかった。それがかれの農民文学の特質を形成したといえるようである。かれの文学的出発の時期は、プロレタリア文学の隆盛期とかさなっている。けれども、当時のおおくの知識人のように階級史観の洗礼をうけることなく、それだけに自己の立場の社会的位置づけには注意がむかず、その反面プロレタリア文学がふかくはほりさげえなかつた農民の感情や意識、農村のふるい慣習や複雑さわまる人間関係を克明に描写するところに、自己の文学が独自に存立する根拠をもとめたといえるであらう。そして故郷と生家のあ

りようを、多少とも客観的に認識しうる距離をもっていたはずの東京在住をやめて、帰郷土着したことが、かれの文学の質を決定した。

プロレタリア文学の壊滅は、地主としてのやましさにかれを直面させる外からの強制力の消滅を意味したはずであるし、かれが安心して農民の日常的現実の描写にいつそう埋没してゆける条件をつくりだしたのである。だから、農村生活の細部を丹念に描きあげ、その意味で農民の日常の実態への認識者としての作家和田伝の相貌をうかがいあがらせる一方、農村・農民を巨視的に日本社会全体のなかに位置づける客観性をもちえなかった、というかれの文学の基本的性格がつくりあげられたのである。この性格が天皇制ファシズムの支配が強化されるにつれて、かれの文学の弱点を拡大・露呈させる原因になるのだが、そのことについては後述する。

かれが次・三男の生活の突破口として、軍隊の恩給制度や養子という家督相続制度による土地保有に狂奔する状況を、その作品に描きつけたのは、地主としてのうしろめたさから解放されるために、眼前の次・三男問題をどうしてもとりあげねばならなかったからである。そのうえ、かれが地主としてまともにうけとめれば、かれの人生観・社会観に変革をもたらす可能性をもったマルクス主義を、避けてとおったことによって、自分じしんのよってたつ階級的基盤を客観的にみきわめることから、いつそう遠ざかる結果になった。

それに拍車をかける状勢を、一九三七（昭和十二）年の日中戦争の勃発が招来したといえる。この戦争は和田個人だけでなく、文学界全体に深甚の影響をあたえたのだが、とりわけ和田文学はこの激動する時代のなかで、ますます農民密着の傾向をつよめていった。そのひとつの頂点がその年十一月の『沃土』^⑥であった。

伊兵・ふでの老夫婦は孫の誕生を混望しているのだが、息子の兵太と嫁の銀とのあいだにはまだそれが恵まれない。「若い頃朝鮮の守備隊時代に貰つてきた兵太の病気のおかげで」、銀はこんど三度目の流産のうきめにあう。伊兵ががっかりするのは、たんに嫡孫の顔がみられないという世間ふつうの理由からだけではなかった。伊兵の家には聖代橋に五反の田がある。

伊兵はその田を分家する時親から分けて貰つたのである。親はこの三反を分けてくれ、なほそれにつづく二反は時価で売り渡すから稼いで蓄めると言ひ、死ぬ時にもそれを言ひ遺すことを忘れた。伊兵の泥にまみれた一生涯は、言ふならばただその約束の二反の田を買ひうけることに費されたのである。彼はそれを実現させた。二十代の時のその約束を、実現させた時にはもうすつかり禿げあがつてゐた。昔五六十円の田は六百円にもなつてゐた。あれほど弟どもに分けられる田地が惜しく親を呪ひつづけた

本家の兄でさへ、彼が生涯わき眼もふらず爪で拾ひためたその勤儉な貯蓄には本心から兜をぬいで田地は売り渡してくれただのである。祖先から代々、まだそこが旗本の采地だった時代から血と汗を流し込んできたその田地には、他人の播いた作物は夷らぬといふのが伊兵には固い信仰である。息子がそれを引嗣いだのを見届けたくらひで彼には承知がゆかず、息子の息子が、できるならその息子の息子さへもが後に控えて引嗣ぎを待つてゐるすがたを見届けないでは死んでも死にきれぬのである。

ここには生涯をかけた労苦の結晶である田地へのすさまじい執念がある。「他人の播いた作物は夷らぬ」と確信するほど、田地と血統・家との結びつきはかたい。田地の相続とその拡張ほど、農民の思想や行動を規制しているものはない。また一般的にいつて、

貧乏人には子供が唯一の財産で、どんなに苦しんでもともかく育てあげれば子供は金箱も同じだ。それは生きながらの抵当物件ともなりそれで金も借りられる。餓鬼のない奴には金は貸せぬとは金貸や地主や商人などがよく言ふ言葉だ。

という農村個々の事情もからんでいる。兵太と銀とは、子どもを生む手だてを講じなければならぬ焦りがあった。そのためにかきだつものは治療費である。そこで銀は、流産によって授乳相手を失つた乳房に他人の子をむかえ、養育料をかせき、それで夫婦ともど

も治療をうけようと計画する。その預り子の世話をしてくれたのは兵太の姉の次男・清平である。清平はかつて「表紙の赤い本」を「いつも懐に入れて」「危険な仕事をやつてゐた」ために平塚の警察署に留置されたことがあり、そのとき「あの恐ろしいところへ清平に会いに行つてくれたのは身うちのうちで銀だけだった」という因縁もあつて、清平の世話でよその乳児をふたり預り、養育費をかせぐ段どりができ、兵太も清平の誘いで農閑期を土木工事にでて治療費を稼ぐことになる。なんとしても聖代橋の五反の田の後嗣ぎをもうけねばならぬ、それは一家ぞつての願望になつていた。ことの成否は兵太の姉や弟にとつても重大な関心事であつた。弟の新次郎は銀の三度めの流産を聞いて、ほくそえむほどの関心のもちようである。銀が手術後の経過がよくて、退院して帰る道中の心おどりは、のちの太宰治の『満願』に類似している。しかし帰宅してみると工事現場の土砂の崩壊で兵太は瀕死の重傷をおり、家にかつきこまれたところであつた。その兵太の死は、後嗣ぎ誕生への一家の期待を粉碎してしまつた。この一家の放心状態をよそに、聖代橋の五反の田のゆくすえをめぐる、兵太の姉・やま、弟・新次郎たちの思惑や相互の猜疑がいりみだれるさまは、土地に執念をもちやす農民の心理を描いてあますところがない。やまと新次郎のあいだには、姉弟であるにもかかわらず、たがいの思惑と打算から暗闘がは

じまっている。自家の持ち田をへらさないために、やまは次男・清平の、新次郎は義妹・貞代の身のおちつき場所をそれぞれさがしあてねばならぬからだ。清平は街にでて職をさがせばいいようなものだが、かつての思想運動で検挙されたことがたたって「産業組合の倉庫係の口も」「無尽会社の口も」ないばかりか、「小作田の貸し手さへない」のだ。だから、やまは伊兵にとつては孫の清平を兵太のあとにいれて、七つ年上の銀にめあわせようと考えてる。貞代には、父の彦造が新次郎の相続分から四反をわけあたえ、分家させて適当な婿をむかえさせようともくろんでいるが、新次郎にとつてもその妻のふにとつても、二町歩の田畑をもってはいるものの、その四反の割譲は身をきられるほどに耐えがたいのだ。しかも貞代が義兄・新次郎の子を孕むという事態が突発して、貞代を伊兵の養女にもちこむ新次郎の計画は、やまの計画よりも実現性のとほしいものになってくる。ところが、銀には「この家の聖代橋の田を継ぐ者が、清平のほかにある道理はいくら考えてもない」という判断があり、しかも清平への年令をこえた慕情がめばえている。そして伊兵の念願がかなえられる日がちかづいたのである。

伊兵のところの聖代橋の田にやがて後を嗣ぐ者がくるのである。

田植にはそれが来る。その行末を考へると夜も眠られぬと嘆き嘆きた孫が、その田植をするのである。伊兵の幸福はそればかり

ではない。その顔を見ないでは人間死んでも死にきれるものではないと言ひ言ひした後嗣の後嗣が、すでに嫁のあらたによくたがやされた沃土のなかで日に増し生ひ育つてゐたのである。

作者自身、この作品について「土地と家族制度が密着して、その上に立った農民の生活というものを書いた」と語っているけれども、そういっただけではじゅうぶんではあるまい。この作品に登場する人物群は、彦造・伊兵兄弟のように家産伝承型の農民と、兵太・新次郎兄弟のように積極的な家産拡大型の農民と、土地に選ばれたそういう農民にたいして、小作田さえ手にいれがたいゆえに、やや自由な批判をもちうる清平のようなタイプとにわけることができる。なかでも反国家的思想運動に参加するだけの批判的理性をもった清平と、その清平の人がらと才知に好意をもつ銀とのくみあわせには、前二世代とはたしかにちがった思想や行動をよみとることができる。清平には新次郎・のお夫婦を「田餓鬼」とみる眼があり、銀は働き手にはちがいないが、「田餓鬼」にはなっていないところがある。農民の伝統的な生きざまへの徹底的なたたかいはないけれども、その生きざまに無条件には屈従してしまわない若い世代の台頭がみられ、ながい伝統をもつ農村社会にも、時代とともに、ようやく変動がおころうとしている状況を暗示している。しかし作者の興味は、その変動のゆくてを模索し、農村や農民のありう

る未来の姿を追求するほうにはむけられず、清平と銀とのあいだにたゆとう愛情の経過にこそがれているために、ふたりの未来図をとりがしてしまい、清平も銀も伊兵・兵太の父子相伝の土地に結局は縛られる境遇を、よろこんでうけいれるという結末になったのである。そのうえ、清平が左翼運動から離脱した事情としては、過去の検挙の一件でさりげなくふれているだけで、かれの心情・思想の変化はまったく描かれていない。だから、どういふ変化の経緯を背景にもちながら、銀と結びついていったのか、読者にはわからず、ただ作者がふたりの愛情の推移にかなり力をいれているために、過去における左翼運動の体験者としての清平の現実をつい忘れて、すっかり銀との素朴な愛情の成立を是認させられてしまう、という作品の構造をもっている。しかし考えてみれば、清平のような過去をもつ青年が、愛情があるとはいえ、なんの抵抗もなしに農村の伝習的なくみに組みこまれていったというのは、不自然でもあるし、清平の内面にそくしていえば、飛躍があるといわねばならない。その不自然さや飛躍を作者はふたりの愛を成就させることで、おおいかくしてしまったといつてよいであろう。そうすれば、かつての左翼運動家として清平を設定したことの意味は、ほとんどなかったとみてよいことになる。この作品の執筆が、中国との全面戦争に突入した年であり、いわゆる「転向」の季節がすでに終っていた時期

戦時下の文学へその七

であったために、作者が時代状況を考慮して清平の転向過程を描かなかったのだというよりも、そもそも作者にとって「転向」は、時代をいろどる風俗のひとつとしてしか印象に残っていなかったとみるべきであろう。したがって清平の設定は、左翼の名残りをもつ人物を登場させることによって、わずかに時代を暗示する役割をはたさせたという意味にとどまるのだ。しかも、このふたりのひめやかな交歓が抑制された筆致ながら、もっとものびやかに、よく描けているというのは、時代や農村の重要問題に近接する内容はらんでいた作品であっただけに、皮肉な結果といふべきであろう。

さらに、農民の土地への執着を、作者は農村生活のなかで、どのようなものとして性格づけているかという問題がある。

三反貫った田地を遺言通り五反にふやすことに伊兵の一生涯の労役が過ごされたとすれば、本家の兄彦造のこれも生涯を賭けた労役は、その分家に分けられただけのものをとりかへすことだけに費された。(中略) 婚期の娘を泥によごして見向きもせず稼ぎに稼ぎ、そしてともかくもその分家に分けられただけのものは彦造はとりかへした。

彦造は分家する弟・伊兵に田地が割譲されると、いいしれぬ怒りと憎しみを父や弟にいだいたのだが、こんどは彦造が貞代を分家させようとして、養子・新次郎に「肉が剥がされるほどにも惜しい」お

もいをさせている。田畑の相続をめぐる、このように骨肉のあいだに憎悪や嫉妬や憤怒の感情をわきたたせ、失地を回復しようとして、さまざまの労働へ農民をかりたてるのは、なんであったろうか。兵太の母ふだが、預りの赤児をむかえるのに、おしめを作ろうとして回想するところがある。

あの繭の馬鹿値の時だったらおらほんとに繭綿でこしらへるがな。(中略) あの時はおら本気で繭綿でおしめをこしらへるつもりだったぞ。お父ツアンお前の禪も白絹でこしらへな。おらも下帯をそれで作るつておら言つたぢやねえか?

ふでこの発言を作者は「昭和五六年のあのおそろしい時代のことを言っている」と説明しているが、預り児をむかえようとして、狂喜している伊兵一家の人たちが、有頂天な気持をあらわすのに、かつて繭価が暴落したときの利用法をひきあいにだしているだけであって、あの農業恐慌のときの深刻な経済的打撃や心理的な不安そのものが回想されているわけではないのだ。つまり作者は「昭和五六年のあのおそろしい時代」の農民の体験と、こんにちの農民の生きざまとを結びつける視点をもとうとはしていない。この『沃土』とほとんど同時期に書かれた伊藤永之介の諸作品をくらべてみれば、「おそろしい時代」がその作家にどのような重みでうけとめられたか、そのちがいが歴然とする。伊藤の、たとえば『臭』には、農業

生産ではもはや食ってゆくことができな小作人たちが、こぞって濁酒密造に活路をみだし、「臭」のように「夜のあけないうちに村から村へ飛びある」いは売りさばいて、いくばくかの現金を手にする。が、不意うち検査で摘発され、罰金が払えないために労働場におくられ、金額にみあうだけの使役に服さねばならぬ、そういうみじめな小作人の女房たちや老人の群像を、その背後に農業恐慌のすさまじさを見すえて描いている。また『鴉』では、やはり小作農の子女が苦しい家計をたすけるために、小企業の管巻屋や織屋に前借をして年季奉公にでたあげく、前借は減るところか、雇用主と口入れ屋の策謀で工場の住みかえがおこなわれ、結局、酌婦、娼婦へ転落してゆかねばならぬ哀しい運命を描いている。伊藤は、あきらかに、世界恐慌のあふりをくった日本の農業恐慌の実状をふまえながら、それに翻弄される小作農の悲惨な生活苦をみつめている。一九三〇(昭和五)年十月号の『中央公論』掲載の高倉薫「惨苦農村報告書」、青山修平「俺達の行くのは何処だ」、加茂健「此の窒息から免れたい」などの諸記録に書きとめられているように、地主の専横、米価・繭価の暴落、人身売買、飢餓、過重労働の実態が、当時の農村にはあったのである。これらの諸事実とかさねあわせて『沃土』をよむとき、そこに展開されている土地をめぐる憎悪・怨念の争いなどは、これら小作農であることさえも困難になって

いた零細農民の惨状とはくらべものにならない、まだゆとりのある階層の生活実態であったといわねばなるまい。土地をもっている農民の、もてるがゆえの欲望の肥大であったにすぎないのだ。和田伝が、農業恐慌を通過しきっていない農村を作品の背景に設定しながら、なぜこのような農民像にしか視線をむけなかったのか、という問題がでてくるであろう。それは農民のおかれている状況を、小作人と地主との関係として現実的にとらえることを回避したためではないのか。いいかえれば小作人对地主の関係を、土地と農民との関係、農民の土地への本能的執着として抽象化してしまえば、文学作品のなかでかれは地主としての自身と対決しなくてすむのである。

土地と農民との関係という抽象的定式をつくれれば、もはや自作農であろうと小作農であろうと、農民としては同質でしかないのだ。土地にしゃにむに執着する農民像を描写することで、あらゆる階層の農民の姿を描くことになるはずだという創作方法である。したがって、すさまじい労働にかりたてられる農民の姿がつよくうきばりにされるのだ。「村の次男」で述べたように、みずからの地主としての立場を、小作人の眼でとらえないこのような文学の方法では、農村・農民の苛酷な現実の内部にふかく迫ることは不可能であった。この抽象化という方法上の工夫は、かれとしては個人的な立場から、そうせざるをえなかったのだろうが、時代の支配権力からすれ

ば、土地と農民という一般的関係に換置・転換されたこの作品のテーマは、小作人对地主という日本資本主義における搾取の根源的形態を象徴する社会関係のあらわな描出よりも、歓迎されるだけの価値をもっていたはずだ。それは普遍的な農民像、つまり農民に共通する本能的な土地所有欲として、危険な毒素ぬきの姿で、世間にうけとらせるのに役だつからである。ところが、この関係の転換にこそ、農業生産の増進が国家的要請となる戦時体制下にはいると、和田がそれに対応して、後述するように、篤農主義や農本主義におちいつてゆかざるをえない必然性をはらんでいたというべきである。

- ① 『改造』昭和九年三月号。
- ② 『早稲田文学』昭和九年六月号。
- ③ 歴史学研究会編『太平洋戦争史Ⅰ』（青木書店）一六七頁。
- ④ 砂子屋書房刊（第一短篇集）。
- ⑤ 『小説』第二号（昭和十一年九月）。
- ⑥ 砂子屋書房、昭和十二年十一月刊。
- ⑦ 「大地の声をさぐる文学」（『毎日新聞』昭和五十一年九月七日・夕刊）。
- ⑧ 「農村生活者の手記」特集。

2

『沃土』で第一回新潮社文芸賞をうけた和田伝は、翌一九三八（昭和一三）年になると、旺盛な創作活動を展開する。「新農民文学叢書第一篇」として出版された短篇集『螟虫と雀』、中・短篇集『風土』、長篇『生活の歪』などがそれである。

『螟虫と雀』には、八篇の短篇がおさめられているが、そのなかの「村里」には、作者が「私」として登場してくる身辺スケッチふうの十の小短篇がふくまれている。八短篇の主題は、従来どおり、農民の土地への妄執を主調に、かつての作男と下女との四十年後の数段の生活格差を姑・嫁の問題にからませて、哀感をこめて描いた「麦野」のような佳作とともに、村のエピソード——貸金とりたてに奮闘する後家のがんばり、一年まえに死んで葬られた娘の棺桶が洪水におしながされて実家に流れついたという不気味な話など——をちりばめ、「非常時」や「時勢」、昭和十年創設の「青年学校」などという時代個有的ことはや呼称に、その時代相を隠微に反映しながら、和田のこの時代へのかかわりようが示されている。それは農村の伝統につよく拘束されながら、その農村とともにあらたな変貌をはらむ時代の流れにさらうことなく、作者自身も流されている姿である。それが「豚ども」「流された家財道具」「まさの仔豚」

などの小篇に肯定的に描かれ、村における今まになかったあらたな秩序維持の方法や結婚生活観などに、つよくその時代色があらわれてくる。『沃土』まではあまり変化しない農村・農民を描いてきた和田が、この時期にいたって、かわりつつあるそれらを描きはじめたことは、注目しておかねばならないところである。が、それらを描く和田の意識がどういうものであったかを知るうえで、看過できない小品として「村里」のなかの「颱風がすむ」という身辺スケッチがある。「九月一日の颱風と豪雨」で収穫まえの稲を濁流におしながされた朝の状況を作者はこう描写している。

早稲はすでに出穂を急ぎ、中手はその莖をふつくらとふくらまし、中に孕んだ穂のゆたかさを、思はせてみたのが、一朝にして濁流に押流され、沈められ、櫛にかけた髪のように押し倒されたところであつては、泣くにも泣けない。

そういう小作人は、死活の問題に直面しているはずであるが、それにもかかわらず、被害の実態を掌握しようとするよりも、地主である和田の注意は、「その泣くにも泣けない気持に誰彼の相違がある筈はないのだがそれを行動に移す段になると、誰彼の相違ができてくるのである」という一点に集中する。地主として、こういう災害のばあい、どのような行動を小作人がとるかということにしか関心がないのだ。「八十人ほどある」小作人のうち、陳情に「やっ

て来るのは十人の上はない。そして、その十人足らずの小作人の顔ぶれはいつもきまつてゐる」「どんなひどい被害を蒙つてもやつて来ない者はきまつてやつて来ないし、どんなささいな、蚤の食つたほどの被害でもやつて来る者はきまつてやつて来る」。そしてその注文の内容には三種類あつて「水を防ぐ材料をくれる組と人足を出してくれる組、もう一つは案内するから被害を見られる組である」といふ。和田はこれらの陳情のうちで、前二者の「いけ洒々とし」たずうずうしさに内心ではなかなば立腹しながらも「水を防ぎ決潰を防がうとかかつてゐる」点を評価して、「いやな顔ひとつ見せず」に求めに應ずることになっていると得意げである。かれが腹にすえかねているのは「見てくれろ組」で、「さういふ被害を防ぐことでは私に何の助力も求めないのが彼等の通性で、その被害の状況を私に見て貰ひ、暮れへ行つて小作料をまけて貰ふことばかりしか彼等は考へてゐない」からであり、しかも「そいつの被害が一番だといふのも何でもない。もつとひどいのが他にある。そんな時、私は思ひ知らしてくれようと思ひ、そのもつとひどい被害の稲などはそいつのよりもつと丁寧に見もつと深い同情を寄せる」といふとき、和田の地主らしい意識構造や対応の姿勢が、鮮明にあらわれてくる。小作人のそういう狡猾さの由来を、ふかく究明しようとする姿勢はみられない。「やつて来ない者はきまつてやつて来ない」

といい、「やつて来る者はきまつてやつて来る」という事実の説明のかけに、ふたとおりの小作人にたいする和田の好悪の感情が、あからさまにはたらいしているのをみのがすわけにはゆかない。「小作料をまけて貰ふ」ためにへたな陳情をする小作人たちの生活の実情にたいする考慮は、「きまつてやつて来る」のだからという理由で、はじめから無視され、「見て廻ることもあれば廻らぬこともある」といふ横着な対応となつてあらわれるし、その反面、「どんなひどい被害を蒙つても」「やつて来ない」小作人は、地主である自分を信頼しきつてゐるものと確信している。

さてこの見てくれる組がそのため少しでも得をしてゐるかと言ふとみじんもそれはしてゐないからをかしいのである。やいやい言つて来たからといつてよけいまけて貰へるものでないし、言つて来なかつたからと言つて損をするものでも断じてないのだからなほさら私にはをかしいのである。

ここには小作人にたいして公平であり、かれらの生活のすみずみまで知りつくしていると自任する地主としての自信がみえる。「きまつてやつて来ない」小作人たちの胸中にも、あるいは、不満やさらにおおきな打算がはたらいしているかもしれない、という思慮はないのである。「やつて来ない」のを、自分への満幅の信頼であると確信している。八十人ほどの小作人をかかえながら「小さな地主」と

みずからを規定する和田は、伝統的な土地制度——とくに小作制度の矛盾にたいして批判的な眼をむけていないばかりでなく、むしろ、その制度のなかで地主对小作人のあいだに、調和的な関係をつくりだしうるはずだし、現に自分はそれを実現しているという、主観的温情主義者としての自負がある。つまり、かれは地主であるがゆえに、地主と小作人とのきびしい現実的・階級的關係を、その自負によって視野のそとに排除しているのだ。小作制度の内包しているさまざまな問題は、地主のありかたしだいで解消できると考え、その実証者である自己に満足し、したがってみずからの立場にたいしてなにほどの反省も批判もいっていないのだから、それにとともなう痛切なうしろめたさや、やましきなどは、深刻に自覚されようはずがない。地主としてではなく、あくまで自己を農民の理解者・扶助者として容認できたのである。この自信满满的な地主が、前述のような意識と行動のうえにたつかぎり、かれの善意をもってしてもどうにもならない日本における農地拡大の限界という壁につきあたったとき、どういう方向へその進路がひらかれるだろうか。

次の作品集『風土』は十一篇を収めている。そのおおくは和田がいままで描きつづけてきた農村生活、そこにおける人間関係の絡みあい、過重労働、老若世代の意識の対立などが、手なれた筆致でとらえられているが、ただ「風土」一篇は、時代の動きに敏感に反応

しているし、そのことをとおして、作家としての和田の変化をみることができる。かつての三多摩自由民権運動の発祥の地に、四十年後のいま、青年たちを中心とするあたらしい農民運動がはじまろうとしている。

働け働けと勤労を教へられるがその働く土地がないといふ百姓がこの農民です。土地のない百姓といふものが考へられますか？ 若い者たちがそれをどう闘つてゆかうとしてゐるか。具体的には大陸への進出も研究しますし、農法の研究もやつてます。産青聯の経済運動を政治的活動にまで強化することにもなりません。

農村のあたらしい胎動がうかがえるが、看過できないのは、なんのわだかまりもなく中国大陸への移民が志向されていることだ。それには理由がある。大正末期から昭和初頭にかけて日本国民高等学校を拠点に、農民教育に没頭していた農本主義者・加藤完治は、

先生のお話はよく分りました。それで自分は、あくまでも日本農民として立ちたいという決心がつきまじりましたけれども、私は小作人の子供でありまして、耕す土地もありません。私は農業が出来ないのではない。腕はあるし、何とかしてやりたい。先生のお話を聞いて、ことに自分は農業をやりたくなくなつたけれども、何処でやるのですか。

と教え子に訴えられた^③という。返答に窮した加藤の関心が大陸へむ

けられはじめるのはこの時からである。「満蒙の野こそ、われわれ神州の民が敢然と進出すべき天与の土地だ」という認識をもつにいたり、それが決定的なものとなるのは、「事変」と呼称された一九三二（昭和六）年くらいの大連侵略戦争の開始からであった。その翌年、さっそく加藤は関東軍の東宮鉄男と組んで武装移民計画を具体化し、数次にわたって「移民団」「少年隊」を大陸へ送りこみ、一九三七（昭和十二）年十一月には石黒忠篤らとともに「満蒙开拓青少年義勇軍編成に関する建白書」を近衛文麿首相に提出、同月末には「満州に対する青年移民選出に関する件」として閣議決定をみるにいたっている^⑤。中国大陸への集団大量移民が、国策として推進されることになったのである。しかも和田はその翌年の夏、加藤完治が主宰する茨城県内原の満蒙开拓青少年義勇軍訓練所を訪ね、その時から、

私は内地農村のいろ／＼な問題を大陸との関聯なしには考へられぬことになってしまった。私は急に目の先がひらけたやうに思ひ、大陸のことがそれから身にしみて切実に考へられた。日本海が埋つてしまひ、満州はすでに陸つづきに考へられた^⑥。

というのである。おそろくこの時、和田は加藤完治と会い、その大陸移民論を注入されたにちがいない。加藤は、すでにはやく一九三二（昭和七）年には、

真面目なる日本農民を満蒙の天地に移植して荒地の開墾に当らしめ、匪賊の横行する満蒙を世界の平和郷と化するのは、我が大和民族の使命なりと確信するが故である^⑦。

という見解に到達していたのだから、和田にむかってその所信をまくしたてたであろうことは想像にかたくない。このような時代の動きを作品「風土」の背景にすえてみると、中国大陸への移民という思想が、農村青年たち、とくに農村の土地問題が地主制度を固定したまま考えられるかぎり、永久に土地をもちえない次・三男をたやすくとらえた理由がはつきりするだろう。そこには、もはや侵略が侵略とさえも意識されず、したがって中国大陸が他国であるとも意識されないで、あたかも自国の土地でもあるかのようにおもいなされていた、当時の国民的風潮の無反省な投影をみることができる。かれらの大陸への進出が、中国農民から農地を収奪する結果を招くことなど、考慮のそとにおかれていたといえる。和田の作家としての眼が、中国農民の心情にまでおよんでいないのは、自己周辺の小作人の不安と苦難にみちた生活現実の問題にのみ集注し、そのうえで地主制度の矛盾から眼をそらしたまま、その制度内で問題の解決ができると確信してきたかれの地主としての思想と姿勢に由来するといわねばならない。おもしろい生活をせおった耕人としてみずから汗をながさなかつたかれは、農民と土地との関係を、たんに量的なバラ

ンスの問題としてしか認識できなかった。中国農民の土地をうばわれる現実を目撃しながら、かれらの痛烈な怨恨の情にふかく共感することができないのだ。まして中国農民の無抵抗の沈黙状態を「民族間の融和の実はあげられてゐるやうであつた」というとき、そこには軍部唱導の「日滿融和」のスローガンに便乗して、中国農民の実態から眼をそらしてしまつた和田の姿しかみることができない。和田が軍部や加藤完治らが醸成した「大陸移民」という時代風潮になんの抵抗感もなしにのめりこんで、それをそのまま「風土」の一人物の思想として肯定的に定着しえたゆえんは、作家として現実をきびしく直視する眼を放棄したところにあつたといふべきであらう。こうして、かれの作家活動は、とめどなく時代の流れによりよつて展開しはじめるのである。

『風土』にひきつづいて発表された長篇『生活の盃』は、時代の波をまともにかぶつた作品である。農民層における新旧世代の交替への胎動と一九三七（昭和十二）年開始の日中全面戦争とが、作品展開の中心にすえられ、戦争が農村を変貌させてゆく過程が手なれた筆でこまかにかきこまれてゐる。作者じしん「後記」につきぎのように一篇の意図を語つてゐる。

この小説では、私はより多く農村の若い時代を描かうとした。

古い、孤立的で排他的で、従つて徹底的に利己的で独善的な、從來私があんで描いて来た農民性格と、若い、少なくとも協同的共立の精神を基調に生き抜かうとする新しい型の性格とを、その相剋と摩擦の線に沿うてふたつながら描かうとした。この若い時代の協同精神が、かなりはつきりとしたひとつの方向を指ささうとしてゐたところで支那事変になり、そして事変がこのふたつの時代の相剋や摩擦の線にどう投影をしたか、どんなふうにも農民はそれに鍛へられ訓練をされることになつたか、その訓練がいかに手きびしいものであるかといふ、これら戦時下の新しい生活の横相を通して、私はこれを描かうとした。

おなじこの「後記」で、かれの従来の作風について世間には「何故新時代の若い農民層を描かうとしないのか」という批評があり、代表作とされた『沃土』についても具体的に「何故新時代を生き抜かうとする、さういつた若い時代の農民層を代表してゐる清平を」描ききはじめなかつたか」という世評のあつたことを語つてゐる。したがつて「農村の若い時代」「新時代」と、深刻化してゆく「支那事変」の進行とをかさねあわせて、農村・農民・戦争の相関関係を描きたさうとした意図のあつたことはあきらかである。が、その意図は実現できたろうか。たしかにいまみる『生活の盃』には、この三者の關係が描かれてはいるが、この作品の前半で志向した「農村

の若い時代」の追求は、その当初もっていた農村改革、いいかえれば農業技術の革新と農業経営の合理化——それによる新旧世代の交替——の方向が、戦争目的の遂行という国家要請に吸収されて、ほんらいの方向をみうしない、かれのいう「新時代」色にぬりつぶされてしまったというのが、この「生活の盃」の創作過程であった。というのは、ほんらいの農村の現状にそくした改革が、国家要請にもとづく戦時体制に規制された農村のありかた——召集による若い労働力の減少、食糧増産の至上命令への対応——にくみこまれてしまったにもかかわらず、作者はかならずしも「農村の若い時代」と「新時代」、つまり戦時体制とのちがいを明確に区別して意識していたとはいえないからである。柏木繁市や乗杉源八などの若い世代の「協同的共立の精神」は、産業組合という組織に具体化され、そこを舞台に稲の品種改良や協業機械化による耕作の技術改革が、老世代の反対に抗してくわだてられていたのに、こういう協同作業は、戦争の進行につれて、働き手をうしなつた出征家族への労力援助という方向に変質しはじめる。従来つよかつた老若の対立や個人の感情的確執も、戦争という公状況のまえには、とるにたらぬ小事としていつのまにか自然に解消されてゆく。戦争が強制したこのあたらしい事態を、作者は「新時代」とよぶのだが、かれが当初描こうと企図した「農村の若い時代」の動き、農村の体質変革を志

向する若い世代の願望とは、とおくかけはなれたものになってゆくうとしている事態を、なんの抵抗もなくうけいれてさえている。この戦争のもたらした変化が、個人の善意や組織の援助でまだカバーできているこの段階では、戦争が農村を決定的な荒廃におとしいれる数年後の様相を想像することはむずかしいとしても、若い世代の農村変革の志が挫折させられてしまい、つぎつぎにかれら自身も応召してゆく状況であるのに、この戦争によって農民が「鍛へられ訓練をされる」というふうにうけとめたところに、この作品のテーマが変質せざるをえなかつた原因があるといわねばならない。そこには、農村が労働力を戦争にうばわれ、若い農民たちの出征という命がけのきびしい運命への、作者の心のいたみはみることができない。「人手なんか現在の半分になつたつて平ちやらだ」といい、出征兵士には勇ましい挨拶しかさせていないのだ。この作品はじつは農村の崩壊過程を描いているのだが、その崩壊の兆をすら予感していない。この戦争にたいする作者の楽観的な展望と無批判な容認がみられる。あくまで農村の改革を志向する若い世代のたたかいに執着して描いてゆけば、戦争はそれをはばみ蹂躪するものとしてとらえられただはずだ。しかし、

事変のもつほんたうの意味が、ちか身に触れて、みんなにわかるやうになります。(中略)戦争といふものが、いや、大陸がだ、

大陸が海を越えた遠いところに考へられてる間は、農村はまだ戦争をしちやあぬえんだ。大陸はここにある。めいめいの村や耕地にあるんだわ。

と熱っぽく語る繁市の思想は、もはや作者のそれだといつてもいいすぎではないであらう。

- ⑨ 砂子屋書房、昭和十三年十一月刊。
- ⑩ 教材社、昭和十三年十一月刊。
- ⑪ 新潮社、昭和十三年十一月刊。
- ⑫ 使用用語からの執筆時期の推定——昭和十年四月以降、昭和十二年七月七日以前。
- ⑬ 松本健一「日本農本主義と大陸」（『思想』七六年六月号）。
- ⑭ 小山寛二『荒野の父加藤完治』（講談社）二二六頁。
- ⑮ 上笙一郎『満蒙開拓青少年義勇軍』（中公新書）三六頁〜三九頁。
- ⑯ 「後記」（朝日新聞社『大日向村』所収）三七七頁。
- ⑰ 『農と日本精神』（千歳書房）四三頁。
- ⑱ 「北満の冬近く」（金星堂『藁草履』所収）一四四頁。
- ⑲ 新潮社、昭和十三年十一月刊。

3

こうして『生活の盃』の翌一九三九（昭和十四）年六月には、中国大陸への移民問題を正面からあつかった長篇『大日向村』^⑩が執筆される。これは千曲川の上流、長野県南佐久郡大日向村（当時）の、村を二分しての大陸移民の経過を描いた小説である。作者の「後記」によれば、

作中の人物^{ぶつこ}必ずしも実在の人物ばかりではない。勝手な人物を勝手に作者が創造したものと思つて戴きたい。事件にしてもさうである。本名をそのまま使つた人物の場合でも、ここでは私の小説中の人物なのであつて、実在の方々とは一応切り離して読んで戴きたいものである。（中略）ただ数字だけは厳正を期した。

とことわつてはいるけれども、執筆前年十月十三日から三日間、大日向村へ取材にでかけ、そのときの見聞の事実が、この作品の骨格をかたちづくっていることはいうまでもない。ひきつづいて「十一月七日、私は有馬農相の御配慮で農民文学懇話会から大陸へ派遣され」真先に私の足が向いたのは四家房の大日向村であつた」とおなじく「後記」に記されているところをみれば、さきの取材と大陸での大日向村訪問とが、作品執筆の決定的な動機になつたのであらう。その「後記」につきようにあるところからも、それはあき

らかである。

大日向村の分村計画は大日向型と言はれ、すなはち一村をもつて一移民団を形成し、村を縦に割って地主、中農、貧農のすべての階層をあげて一団をつくるといふ未だほかになかつた画期的な新分村型態である。(中略) 資産、頭腦ともに母村と振分けにし、双方の再建と建設を考へた上での周到な分村である点、注目しに値するのである。

この「大日向型」分村計画は、和田伝を狂喜させたものではなからうか。従来、たとえば石川達三が一九三五(昭和十)年の『蒼氓』に描いたような、内地で食いつめた貧農たちだけが、棄民同様にあつかわれて、ブラジルへ移民してゆかねばならなかったものがなし悲憫さが、全村あげての計画検討の結果であるこの「大日向型」移民にはなく、そのうえ「地主、中農、貧農」という構成の混成移民団であるところに、地主としての和田も、うしろめたさをかんじないですむ理由があつたはずだからである。ながいあいだ、農村の次・三男問題にかかわつて、かれなりに頭をなやましつづけてきた和田に、この移民方式がもっとも理想的で、すぐれた解決方法として評価されたいことはように推量される。このような事情のもとにこの作品は書かれた。

『平日しか太陽を見ない谷底の村』で「農家戸数三百三十六戸」

戦時下の文学へその七

「農家一戸あたりの耕作平均は田一反五畝、畑四反六畝、合せて六反一畝」というのだから「全国平均一戸あたり一町七畝」にとおくおよばず、長野県全体の「一戸あたり平均耕作反別の八反二畝」とくらべても下まわっているのが、大日向村の立地条件であつた。「米にしては四ヶ月、陸稲大麦小麦を混ぜてもやうやく五ヶ月の村内需要にしかあたらぬ」状況では、養蚕、炭焼きなどの副業で生計をたてねばならないのだが、それはまだよいほうで、耕作地をもたないための「炭焼專業の家は四十戸を算へてある」という。このように営農条件が劣悪で、貧窮農民のおおひこの村では、村税の急納はかさみ、とうぜん村の財政を庄迫して「村政のまかなひがつかず、教員の俸給も三ヶ月も遅れ、それさへ全額が支払へず、村会議員への費用支出の如きは数ヶ年も怠り、もはやまつたくに、つちもさつちもゆかなくなつてゐる」ところまでおいつめられていた。さらにわかることには、村最大の富豪で屋号「油屋」を名のる村野吉兵衛の巧妙な搾取によつて、農民の窮乏はいっそう拍車をかけられることになつていた。油屋は私有林四百町歩をもち、焼く炭の原木を農民に売りつけるだけでなく、米、酒、醬油、味噌、砂糖などの生活必需品の販売を一手に独占していたから、現金でそれらを買えない農民の借金と利息はふえて、どうしても払えぬ農民たちは地所も屋敷地も家屋もとりあげられ、はては娘を奉公にとられるしまつてあ

る。油屋は経済的に大日向村を支配する力をもっていたのだ。「昭和十一年の暮れも近く、全村四百〇六戸の屋根々々の下に、そしてまた自治体としての村政運営の上に、かくて大破滅が刻々と近づきつつあった」のである。

これよりさき、長野県当局は満州農業移民計画を立案し、一九三二（昭和七）年以降、毎年二十戸、三十戸程度の小規模ではあったが移民を中国大陸に送ってきていた。一九三六（昭和十一年）年には、第五次移民二百九十四戸を入植させている。大日向村の破局と長野県当局が推進する集団移民のピークとが時期をおなじくしたのである。そこで村長・浅川武麿は、大日向村の窮状を、大陸移民によって打開しようと決意する。二百五十戸を残し、「百五十戸が満州へ移住して、満州で新しく大日向村を建てようといふ考へは夢だらうか？」という、ひかえめな提案がこの村の命運を決定的な方向にみちびく端緒となって、村民の大陸移民への関心を、しだいに熱っぽいものにかえてゆく。そして結成された分村協議会で「百五十戸の現在戸数と、五十名の次三男を選び、新しい子村で二戸を起させて独立させ、合せて二百戸の新村にそれを作るといふ具体案」が最終的に決定をみる。「既存の百五十戸を選出することによって」、残留農家は「二戸当り水田二反一畝、畑九反二畝、合せて一町一反三畝になる」という計算にもとづいた移民計画——母村も子村もともに

活路をみいだしようという、再建と新設の基本構想が、少数の反対意見はありながら、圧倒的多数の村民の支持をうけて承認され、移住農家と残留農家との選別、負債の整理、残留組への土地の再配分という重要問題の処理が、困難な紆余曲折をへて解決され、分村組の大陸へむけての出発というところでこの小説はおわるのである。

ここで、いくつかの問題点にふれておかねばならない。

前述の『生活の盃』にみられた若い世代の農村改革のエネルギーが、この作品では、まったく大陸移民にたいする情熱に溶解してしまった姿になる。『生活の盃』で、農村・農民の現実を変革することから屈折して、戦時下農村の再編成の方向に吸収された青年たちの若い力が、この作品では、他国への植民に活路をみだし、そこへ濁流のようになだれこむ悲しい姿として浮上、結実する。日本内地のさまざまな農村問題の解決方向が、外地植民という、このばあいは、軍事侵略と歩調をあわせた中国大陸への農業侵略となつてあらわれたのである。若い武井すゑが、紡績女工であつたために肺結核のおかすところとなり、とうてい治癒しがたいとさとして、恋人・西川義治に遺書をのこして自殺するにいたる経過は、この作品ぜんたいからみれば、挿入されたいさなひとつの哀話にすぎない。しかし、このふたりが手紙のかたちで書きしるした内容は、こ

の作品の根幹的な性格をものがたっているといえよう。すゑは西川義治あての遺書で、つぎのようにいう。

わたしはもうよくなるあてはありません。(中略) わたしはかういふ身動きもできぬからだをして、あなたが満州へ立つてゆかれるのを見送るのはいやです。くるしいのです。あなたと一緒に浅吉兄さんも行くと言つてあります。わたしがこんなからだであるのをあとに残して行くのは浅吉兄さんも厭だと言つてありますし、あなたもやつぱり同じやうな気持であられるのではないかとお察しします。(中略) お母さんも、わたしさへなければ浅吉兄さんと一緒に、あなたがたと御一緒に、満州へ行かれるのです。(中略) 満州へ行かれれば(中略) 若い娘たちに一日中紡績の綿ぼこりを吸はせなくともらくに暮しはたつときいてあります。あとに思ひ残すことは何もありませんから、皆さんで仲よく満州へ行つて下さい。(後略)

この遺書の内容が村民のあいだに伝わると、それは村民を感動させ、移民熱をいっそうあふる刺激となった。それとともに、三十五年まえの日露戦争で長男が戦死していた、井川クメ一家の移住の決意も村民を感激させた。現地視察から帰村した村の指導者のひとり堀川清躬に「息子墓を蔽ふ雪の深さをたづね、春になるとそこに咲く花の名をたづねる」井川クメの気持ちのなかに、戦死した息子の

骨がねむる中国大陸の土にたいして、異郷のそれとおもえぬ懐旧と愛着の情があったのであろう。すゑの遺書とクメの移民の決意が、種々の打算や思惑のあったこの村のふるくからのエゴイスチックな農民の心理を、大陸移民ひとつにしぼる契機となった。このように移民熱に浮足だった村民の、とくに若い世代の眼は、ほとんどが大陸にむけられていて、「新しい村では、地主も小作人もないんだ」と楽天地を夢みることはあっても、井上俊夫も指摘するように、自分たちの入植によって「中国農民が土地から追い出しをくらうのではないか」といった疑惑を持^①つものはひとりもない。それどころか村の指導者のひとり、小須田兵庫がいうように「大陸開拓の第一線に立ち、島国日本から大陸日本に飛躍する大使命」をになっていると自負する農民たちは、客観的には「大陸侵略政策に無造作にのめりこんで行く思想的、経済的なもろさを持っていた^②」といわねばならない。大陸営農にそなえて、それに必要な訓練をうけるために、先遣隊第一陣二十名の青年たちが、県立の御牧ヶ原修練農場へ出発するが、そのなかに自殺した武井すゑの恋人・西川義治もいた。かれは修練農場長・西村富三郎の農民教育について、入所五日目にして浅川武磨村長あて、つぎのように書きおくっている。

土は深く掘らねばならん！西村先生の御教訓はこの一言でつきると思ひます。ここでの修練は、この一言の実践であり反省であ

ると申してもいいかと思ひます。葦原千五百瑞穂の園のその葦の原野を瑞穂園にきりひらいたのは、祖先のはかり知れぬ努力の賜物ですが、こんなわかりきつたと言へばわかりきつたことを、こへ来てから実は私は知るやうになりました。(中略)土は作るもんで、沃土も良田もいきなり在つたわけぢやないんだぞと、教へられました。(中略)私たちは祖先が流汗辛苦して作つた土に依頼するばかりではなりません。それを益々育て、また新しく土を作らなければなりません。(中略)けふは西村先生から「底津岩根に宮柱太知り」といふ古事記の一節を習ひました。底津岩根とは何か、宮柱太知りとは何か、それは土を深く耕して基礎をふかく打ち建てるといふ意味だと教はりました。建国の大精神も、一言で言へばこの土を深く耕せといふ精神であつたといふことを、いまになつて私は教はりました。(後略)

この手紙を、和田伝は、「しつとりと実感をにじませた、その吐く息に触れるほどの思ひを読む人に起させる、むしろ生きてゐてぢかに息をついてゐるかと思はれる文字を連ねてゐた」と形容する。この手紙には篤農主義と国家主義との結合した農本主義をみる事ができるが、それについて和田はもはや一步のへだたりももつていないことを露呈している。西村場長の説く深耕法は、すでに安城農林学校長・山崎延吉がとなえた農法であり、そのふかい影響をうけ

て加藤完治も主張した「天地返し」と同列である。したがって思想的・実践的系譜からいえば、山崎延吉、加藤完治、西村富三郎という系列になるのであろうか。しかも山崎と加藤とのあいだには、「古神道論」の寛克彦が介在したことをおもえば、西川義治の手紙の内容が、国家主義的農本主義にいろどられてゐるのも、とうぜんであつたといえるし、作者の当時における思想が、それとまったく距離をおいていないことをものがたつてゐるといってよいであらう。「村の次男」「一町三反」「沃土」を書いた和田伝が、どうしてここまで時流に身をまかせることになつたのか、それをあきらかにしなればならないであらう。

そのことを、かれが地主階級の出身だつたからだ、と説明することはたやすい。しかしそれだけだつたらうか。かれはたしかに地主の出であり、家族の生活の全責任をせおつて、農耕に従事したとはいえない。たしかに、かれは鍬をにぎり汗をながした。が、それはかれにとつて、客観的には自己証明——世間普通の地主ではないという——にしか、ならない営農であつたのだ。この作品にそくしていえば、あれほど大陸移民に共鳴してゐながら、みずからはすすんでその一員であらうとはしていない。大日向村の地主——これも井上俊夫の指摘にしたがえば「地主の末っ子が一人だけ移民団の中にまきれこんでくるにすぎない」——も、移住するという作品の展開

をとることによって、自分の立場の免罪符にする意図があったとすれば、文学者にあるまじき自己の正当化であったというべきであろう。

『大日向村』は、『沃土』までの諸作品の作者としては、書かないですむ方向と書かざるをえない方向との、ふたつの可能性のはざまにたつた和田が、後者の可能性におしながされて書いた作品であるというべきであろう。つまり、農村の次・三男問題にたいする階級性ぬきのかれ流の対策志向が、みずからえらんでおちいった陥穽であったといわねばならないのである。

⑳ 朝日新聞社刊。

㉑ 『農民文学論』（五月書房）一七〇頁。

㉒ 前注におなじ、一七一頁。

㉓ 松本健一「日本農本主義と大陸」（『思想』一九七六年六月号）

㉔ 前注におなじ。

㉕ 注㉔におなじ。

4

このようにみてくると、一九三八（昭和十三）年夏の内原満蒙開拓青少年義勇軍訓練所訪問は、和田伝の文学におおきな転換をもた

らしたといえる。その翌年に『大日向村』が執筆され、これにひきつづいて、同年に作品集『殉難』が発表される。中篇「殉難」のほかに短篇「草合戦」「同類」「手帖」の三作品が収められているが、「殉難」以外は、戦争の影響下にある内地農村の変化を、組合結成の動き、地主層における進歩的分子の出現、作者がくりかえし今まで描いてきた兄弟間の金銭貸借のもめごと、農村における篤農型と都会流出型とへの分化などが、熟練の筆さばきで描きだされている。が、「殉難」は大陸の移民村が舞台であって、『大日向村』の続篇ともいべき作品なので、すこし言及しておきたい。

その「後記」には「殉難」について、

大陸の新しい村には過去といふものがなく、若い人たちはいつもさういふものから解き放たれて、まったく新しい生涯を奔放に生き抜いてゐた。さういふ人たちの行動の美しさ、壮烈さに、私は一番心を打たれて帰つて来たのである。この小説に書いた行動の世界は、いづれも北滿の開拓地にひろげられた実話ばかりで、それを一篇にまとめて見たものである。

とされるされている。まえにも述べたように、農民文学懇話会から派遣されていた、開拓移民村の視察旅行の見聞にもとづいて書かれた作品である。『大日向村』については、「勝手な人物を勝手に作者が創造した」といえる部分をもっていたのにたいして、この作品は

「実話ばかり」だという。この創作上の方法の変化はなにを意味しているのだろうか。作品内容から考えると、あらかじめ想像していたのよりもはるかに開拓村には若者たちの活気がみなぎっていたし、『大日向村』の移民たちが期待していた「地主も小作人もない」「新しい村」の建設が、着実にすすんでいる状況をみて、和田はつよく感動したとみてよいであろう。ちようど従軍作家たちが、はじめての戦場、戦闘のなかに身を置いて、兵士たちの姿にまったくあたらしい人間像を発見して感動するとともに、戦争のスケールの想像を絶した壮大さに圧倒されて、事実をこえる想像力を必要としなかったのと、ほほおなじ事情が和田にも作用したとみてあやまりではあるまい。内地の農村をみなれてきた和田の眼に、大陸の開拓村の様相は、まったくあたらしい農村像、あたらしい農民像として映り、そのあたらしさへの感動が、事実のうえにさらに創造した世界を必要とさせなかったのである。ここには戦時下の作家と作品に共通してあらわれやすい創作方法の転換——その実、創造の放棄のだが——はじめて見聞する事実へ作家主体がのめりこむ現象がおこるのだ。いままでに作家の視野にはいらなかった、戦争のもたらす人間や状況のあたらしさが、その作家の描いてきた人間や状況から隔絶していればいるほど、作家は想像力をはたらかせる余地をみいだすことができなくなる。和田もまた「実話」を書くことで、この

「殉難」に、それまでのかれの作品にはなかったあたらしさの感動的な表現をえたという安心感にとられるのだが、それは錯覚であったばかりでなく、大陸移民を基本的に推進する力となった中国への帝国主義的軍事侵略に、加担している自己を自覚できない、いわば時代状況に埋没してしまっていたのである。こういうばあい、作家として駆使できる想像力をもちえないことは、現実をたいする文学個々の機能を放棄したも同然といわねばならないだろう。それは和田の自然主義的リズムがたどらなければならなかった、とうぜんの帰結であった。戦後、伊藤永之介の死去を悼んで書かれた一文は、かれ自身の文学理解の質をものがたっている。

どだい伊藤は農村の現実や機構を縦横に描破するというガラではなく、農民の性格のなかに人間愛の精神を探り出そうとした民話的情趣の濃いりん(稟)質の作家であった。^⑤

伊藤が、「ばくの誇りは、一度も戦争文学を書かなかったこと」^⑥と発言できた文学的実績と、「農村の現実や機構を縦横に描破」しなかったということとを、和田はどのように結びつけて理解したのだろうか。おそらく、和田はそこになんの脈絡も発見してはいないだろう。むしろ、戦時下の伊藤の実績がもつ右の発言のような意味を、故意に無視して追悼文を書いたきらいすらある。これこそ和田の伊藤作品にたいするゆがんだ理解を、みずから示した批評といわ

ねばならない。和田が自然主義的方法で農村を描き、その方法を変質深化させてゆくための道すじを意識的、理論的に追求しなかったことが、前述してきたように、軍国主義と密着する「天皇制農本主義」者・加藤完治の思想にのみこまれてしまふ結果になったことをおもえば、伊藤永之介が、当時、持続することの困難だった階級史観を堅持し、社会主義社会の実現をひそかに確信して、和田伝が加藤完治と思想的に合体したとはおなじ時期に、「梟」「鴉」「鶯」などという秀作を書いていたことを看過してはならないであろう。

伊藤と和田の作風は、農村の現実のディテールを描くという点で表面的には類似性をもつ。が、しかし、伊藤とちがって、和田が軍勢力を背景とする加藤完治流の大陸侵略政策にのっかってしまったのはなぜか。伊藤は農村のどうしようもない貧しい現実を描きながら、その貧しいがゆえにもちうるはずの、人間としての力にたいする信頼を失わなかった。それは社会変革への確信があったからである。が、和田がそれを「愛情」という、かれ自身の文学をも正当化するのに都合のよい用語にあえておしこめて伊藤作品をよみとったところに、前掲の追悼文の、わが身にひきよせた解釈をうみだしたというべきであろう。したがって、和田は、伊藤の本質につかみそこねて、そのつかみそこねた分だけ、自己の文学の本質を語ったといえる。伊藤がすではやく一九三二(昭和七)年に、

戦時下の文学へその七

従来の作品に於いては、農民文学の問題が新たに提起された後に於いても尚、屢々『地主対小作人』といふやうな単純な階級関係しか把握されて居ない多くの作品を見た。／＼複雑な階級構成を有する農村を描くにあたって、単なる『地主対小作人』といふやうにしか見ないことは、現実を動的発展的に見ることの弁証法的方法の要件を抛棄することを意味する。^⑧

と主張した立場を、その後の困難な時代においても把持して、しかも教条主義におちいらぬ柔軟な眼をもって描いた諸作品をもつ伊藤と、「地主対小作人」の関係を機械的には描かなかつたものの、前述したようにその関係を抽象的な土地と農民との関係に移行させ、さらには量的なバランスの関係としてとらえるにいたり、したがって融和と、大陸植民という方向にその対立の解消をもとめた和田とのちがいは、あきらかであろう。

さらに「殉難」には、もう一つ言及しなければならない問題がある。この作品は十章からなっているが、それらの冒頭に「序に代へる小篇」というのがおかれ、これには作者自身が登場して、竜爪移民団本部から林口まで移動するあいだのエピソードを書きとどめている。十キロほどの行程を歩きあぐねていた和田は、都合よく通りかかった満州馬四頭だでの荷馬車に乗せてもらう。和田とその二十才くらいの「貧農らしい」駈者との会話から、若者の身辺の状況が

しだいにあきらかにされてゆく。その年の四月の末かれの祖父の代から住んでいた埤龍崗の部落が、三十人ほどの「匪賊」におそわれ、かれの家でも馬十二頭のほか小麦粉や高粱の麻袋まで残らず掠奪された。馬がなくては農業ができないので、土地も家も売って他の土地へ移ったという。埤龍崗の近くに日本移民の大和村がある。その移民について、この若者は「あれらは苦力です」「やがてまた何処かへ引揚げて行くんでせう」「団の耕地も小作します」「三百人やそこいらで、これだけの土地が耕作できるものではありません。半分もできないでせう」と、底意ありげなことをいいはなつ。和田と若者との会話のなかに、若者と通訳Sとだけの、和田にはわからぬやりとりがあり、そのすぐあとでSと和田は「耕作地がずっと奥の遠いところに移されるので、それがいやなのですよ」「引揚げればいいとはらでは思ってるんかね?」「ええまあ……」という応答があって、和田は若者にたいして「お前なんかの耕地はどっちの方へ移されるんだ」という質問をしているから、若者一家の移住は、「匪賊」の掠奪によるというより、日本移民の入植によって追いたてられたというのが、真相なのだ。ところが和田は若者の「農業は下手ですが、日本人は強いです」「あそこの訓練所の少年が百人ばかり出て、銃を撃ちました」「みんな小さな子供のやうでした、強いものです」「団は強いです。ですから移民団がきてからは、

わたしたちも安心してゐます」というのをうけて、

それもやはり本心であると私たちには見えた。耕地をひきはらひ、他へ移されることはつらいけれど、治安が保たれて来たことは本心からありがたいと思つてゐる。

というように解釈する。日本の移民政策による中国農民からの耕地収奪にたいする怨嗟と、治安維持に有効な軍事力への依存とが、和田のことばにしたがえば、「つらい」と「ありがたい」という矛盾することは、ひとまず集約される。が、若い馭者が、耕地とりあげをそれそのものとして、支配者である日本人のひとりとしての和田にぶっつけなかつたのは、——それを通訳Sとの会話ではあからさまに語つたらしいけれども——それだけに耕地掠奪への憎悪が、若者の心の底ふかくにわだかまっていたからではないか。それにもかかわらず、和田は「ありがたい」ほうがかれら中国農民にとつては、おおきいはずだと判断したのである。それゆえに、この「序に代へる小篇」の後半で、林口の満拓出張所主任Tが話題にする「匪賊」の頭目・汝蘭貞と、林口駐屯軍・山路曹長とを登場させねばならなくなつたのだ。つまり、汝蘭貞は山路にとらえられ、いまは日本駐屯軍に協力する友好的な中国人として描かれている。しかし、頭目であった頃のかれには、おおくの中国農民が移民団や日本軍の動静を内通している。とすれば、汝蘭貞は、たんなる掠奪・殺人をこと

とする盗賊ではなくて、当時、土地をうばわれ、耕地を移転させられたために、侵略日本軍や移住農民にたいして、民族的憤激をいだかざるをえなかった離農・中国農民のバルチザン部隊の指揮者であった可能性がつよい。それがいまや日本軍への協力者として登場させられ、それとともに山路曹長が軍人らしからぬ中国苦力と見まごうようなよごれた姿で登場させられるのは、いってみれば和田流の「日満協調」の具体的な姿ではなかったのか。和田は、中国農民が「匪賊」の襲撃で生命・財産の危険にさらされるのを、日本人が生命と武力で救う、という「日満」関係を意義あるものとして強調することによって、日本移民による中国農民からの耕地とりあげを、農業侵略として正面から見すえて描こうとはしない自己の立場を、許容しているというべきであろう。こういう和田のあいまいな大陸移民問題へのかかわりかたが、「殉難」一篇の骨格となっている。若い駁者、汝蘭貞、山路の三人物とのであいと、それへの作者としての反応をまず「実話」として提示することによって、和田は、この作品一篇のリアリティをあらかじめ確保しようとして企てたばかりでなく、当時の帝国主義的スローガン「日満一体」「王道楽土の建設」を体験的事実として披露し、ひいては前作『大日向村』の中核思想であった、中国大陸への移民政策の正当性を主張する意味あいもあつたとみるべきであろう。

戦時下の文学へその七

「殉難」は、日本移民団と中国農民との相互扶助と提携、なかでも中国農民の長老格・趙海山と竜爪移民団兵庫村部落長・樋口清三郎との民族をこえた信頼関係、また潘徳栄の清三郎によせる親愛感、日本移民団夜間巡警隊による中国農民部落の警備、そして最後の章は、匪団に捕えられた樋口清三郎が、味方の状況を詰問されて人員も武器も「実数を二三十倍にして」答えたあと、

しづかに、しかし叱咤する口調で、撃て！と、再び言ひ、おれは但馬の水呑百姓の倅だ。国にゐた時は振り向いて見る者もなかつた人間だ。いま大陸開拓の人柱になり、ここへ骨を埋めれば本懐とするところだ！撃てと、清三郎は三たび言ひ、その時轟然と拳銃が鳴つたのであつた。

という結びになっている。清三郎の「英雄的な最後」は、和田の開拓農民小説の論理的帰結として、ぜひとも必要とされるものであつたし、「日満云葬者の涙」も不可欠のものであつた。が、和田の熱っぽい語り口にもかわからず、あまりにも和田の論理に都合よくあてはまる清三郎の死であるために、かえって読むものの感銘をうすくしている。「事実」だと抗弁されればそれまでであるが、清三郎の「死」は事実であつたとしても、この作品に描かれたとおりの事態の推移の結果としての「死」であつたのか、という一点の疑惑をもたないわけにはゆかないのである。それはともかくとして、この

一篇には、日本帝国主義の侵略政策と作家・和伝との一体化を確認しておけば、それでじゅうぶんであろう。

『大日向村』『殉難』二作の、みてきたような展開によって、ないあいだ苦慮してきた農村の次・三男問題から、かれなりに解放された和伝は、ふたたび内地農村に眼を転ずる。そして短篇小説・随筆集『平野の朝』につづいて、長篇小説『篤農伝』と『日本の村長』などを書くのである。『篤農伝』が一九一六（大正六）年から一九四一（昭和十六）年までの多賀田忠吉の精励無比の一代記であるのにたいして、『日本の村長』はその時期のあとをうけて、戦時体制下の農民の食糧増産にはげむ姿が集団として描かれている。多賀田忠吉の篤農ぶりは、たとえば独創的な技術改良や熱心な研究による品種改良、粹詰堆肥という新方法の発明、不良田を良田へ転換するための客土利用、糞摺りの動力機導入など、その進取性と積極性にあますところなく発揮される。忠吉の農民としての特徴は、たとえばそれが小作田であっても他人の田としてではなく、自分の田として損得をはなれて、全力をうちこむところにある。忠吉は「二本松十万石のこの阿武隈平野でも、一家六町歩の耕作ははじめてのこと」という大業にとりくみ、「その田植は計画通り、四十日間かかってやり」とげた。さらに植えた田の「水引き」のために雨の三

日をのぞいて「三十七晩忠吉は田の畦で寝た勘定」になるほどの、さまざまな労働である。だから、かれは「歩きながら眠る」「働きながら眠る」という体験もする。そして「昭和十六年二月十一日、建国祭を卜して民間功労者」として福島県知事の表彰をうけるのである。このような働きぶりに和伝は農民の理想像をみている。この作品が篤農主義の讃歌に終始しているのはみてきたとおりであるが、もともと和伝には骨身をおしまず努力をかきねる篤農家、精農家を、農民の最良質部分とみる傾向はあったのである。前述の『螟虫と雀』のなかの「颯風がすむと」では、その対極にたつ悪質部分が描かれていたのだ。それがこの時点にいたって多賀田忠吉ひとりに集中して篤農主義が強調されたのは、なぜだろうか。それは、この作品の統篇ともいえる『日本の村長』をみればあきらかである。その「後記」に、

本篇は、徳島県板野郡松茂村の報国農場制による全村共同作業をモデルとして書いた小説であつて、事実の記録ではない。（中略）松茂村の思ひ切つた農業再編成による全村民の戦闘配置の新興勢は、そのモデルになつたといふに過ぎない。従つて、本篇に書いてある農業上の数字や年月日は事実に基づいて正鵠を期したけれど、描いてある事件や人物は、作者の創作であると思つていただきたい。

としるしている主旨は、『大日向村』の「後記」とまったくおなじであって、モデルが現実にあり、それに作者の想像がくわわったという性格の作品である。「報国農場制による全村共同作業」をささえる基本精神が、篤農主義にはかならないのをみれば、戦争遂行のために絶対に必要とされる農産物増産を実現しようとして、和田がこの時期に考えたことは、松茂村の二木村長を中心とする村全体の軍隊組織化——分隊・中隊・大隊・部隊——という再編成の枠組を理想形態として、そのなかの一人ひとりの農民を篤農主義・精農主義で色濃くそめあげることでの枠組を充填したというのが、この作品の成立過程であったとみてよいであろう。和田にとって農民の理想像は、努力を至上の美德として、当時のことばでいえば「粉骨砕身」働きぬくことが、自作農、小作農をとわず、その必須条件であったのであり、それと戦時下において国家的要請にこたえる最良の農業生産組織として、松茂村の「全村共同作業」の形態がとりあげられて結合されたのである。戦時下の農業生産の増強という要請に衝迫されて、和田がこの作品で描こうとしている眼目のひとつが、兼業農家の非生産性——一反六俵とれる田から三俵しか収量しない——の克服におかれているかぎり、軍隊そのままの組織に組みこまれ、いやおうなしに兼業を専業にきりかえさせられ、全村一致協力して増産の実績をあげるというこの体制が、和田に積極的に評

戦時下の文学へその七

価されたのはとうぜんであった。この松茂村の体制に和田がつよく共鳴したのは、『大日向村』「殉難」をとおして描いてきた農民の組織化、農業の協業化による生産性向上への確信が、すでに和田の思想として定立していたからである。したがって『篤農伝』は、かれが徳島県松茂村に戦時下農村の理想的形態を発見するまでの、臨戦農業のかれなりの理想を、篤農主義の極限に求めていたことをものがたっている。それが理想的形態を発見するにおよんで、その形態の有効性をじゆうぶん發揮させるために、前作の篤農主義を導入したのである。『日本の村長』の「後記」に「描いてある事件や人物は、作者の創作である」といったゆえんであろう。こうして、戦争遂行にとって不可欠の農業生産という分野で、和田は文学的にまったく戦時体制と合体したことになる。農業というひとつの限定された産業部門のなかで、生産性向上の一点に集中して対処するかぎり、そこには、ように篤農主義が成立し、それへの埋没に反比例して、戦争とその強制する体制、それらをささえる思想に無批判に盲従するほかなくなるのは、必然的なりゆきであった。

和田はこの路線にそって、敗戦にいたるまで、同工異曲の作品を書きつづけたのである。

②⑥ 金星堂、昭和十四年十月刊。

⑳ 「貧農への深い愛を貫いた伊藤永之介」〔朝日新聞〕昭和三年七月二八日）

㉑ 分銅惇作「伊藤永之介論」（筑摩書房『現代日本文学大系』

59）（四一七頁）。

㉒ 松本健一「日本農本主義と大陸」〔思想〕一九七六年六月号）

㉓ 「農民文学のために」〔文芸戦線〕昭和七年七月号）。

㉔ 実業之日本社、昭和十六年三月刊。

㉕ 河出書房、昭和十六年十月刊。

㉖ 鶴書房、昭和十八年十二月刊。

5

私たちは統後の農村の作家として、この戦争と建設の非常に重要な局面になつて壮烈にも生き抜いて行つてゐる農村の新しい姿を描ききめなければならぬといふことを痛感してゐる。（中略）作品の世界と現実との溝を埋めることがなされなければならぬ。農民文学は現実より立運れてゐたが、農村の根幹的な骨格とともに新しい実態を探究し、文学上の農村に対する既成のふるい概念を打破しなければならぬ。（中略）農村の條件に深く触れ、農民の意欲に触れるとき、農民文学はひろい意味に於いて政治的たらざるを得ない。それは時代性といふ言葉で言つてもよからう

が、このことも重要な私たちの問題である。

これは和田じしんが「統後と農村小説」^②と題して書いた文章の一部分であるが、ここに語られていることは、和田文学の特徴をあきらかにするにあつて、みのがすことのできない内容をいくつかふくんでゐる。

戦争が農村をいやおうなく強制的に変貌させてゆく様相を、「新しい姿」「新しい実態」として把握しているのは「生活の歪」とおなじであるが、変化であるかぎり「新しい」にちがいないけれども、この文章の文脈にしたがえば、それに「新しい」価値を認めていることは否定できない。一九三九（昭和十四）年という時点では、まだ太平洋戦争には突入していないし、進行中の中国との戦争については、大多数の国民と同様に、敗北の不安などひとかけらもいだいていなかったであろう和田にしてみれば、やがてこの戦争が農村のみならず、全国民生活を徹底的に破壊しつくす事態までも予想できなかったのは、作家としてさほどおおきな不名誉ではないかもしれない。だが、戦争によって農村に変化がおこり、その変化に、かれがそれまで考えてきたさまざまな農村問題の解決を期待したところには、文学者として恥じねばならぬ問題があつたはずである。ほんらい文学は現実をきりひらき、その可能性を発掘して、それを文学的リアリティに転化しなければならないはずであるのに、戦争と

いう文学以外の力に農村の現実の打開を期待したということは、作家として文学のもちうる機能を無視ないし放棄したといわれても扨弁のしようがないはずである。このことは、かれの創作方法ともかかわるし、「農民文学は現実より立遅れてゐた」という認識とも関連する問題である。かれの文学は、農民の「姿」——かれの眼がとらえた現象としての農民の心理や行動——は描くことができたけれども、所与の現実的諸条件に拘束されながら、なおかつ、このようにもありうるはずの農民像の創造にまでは、到達できない方法であった。その創造力のよわさは、大日向村の移民構想や徳島県松茂村の戦時下農村の新体制が、「新しい」現実として出現してくると、それに文学の基本構想がまるまる依拠してしまい、そのなかでの人物像のある程度の創造という域をふみだせなかった原因でもある。いってみれば、文学が現実より先行するという、文学本来のありかたとは逆に、現実が文学よりも先行し、それをただ追跡し描写するという方法であった。その現実のひとつが戦争であったわけで、かれの文学が国策順応の文学にならざるをえなかった理由も、この方法上の特徴に由来しているといわねばならない。「農民文学が現実より立遅れてゐた」というとき、和田には方法の転換を希求する明確な意識がなく、従来のかれのリアリズムでもって「新しい姿」「新しい実態」に対応したにすぎないのであって、それは文学が創

戦時下の文学へその七

造した「新しい」現実ではなく、やはり現実先行型の文学として成立するほかはなかったのだ。だから、「文学上の農村に対する既成のふるい概念を打破しなければならぬ」といってみても、それは、文学によって農村の未来像を創出するという意味には、かれの文学のばあい、ならないのである。その現実密着の文学が、「政治的たらざるを得ない」といわれると、いっそう危険の度合は増大することになる。『大日向村』についての最近の回想談⁵⁵がある。

あのころは日本の農村が行き詰まって、どこかへあふれ出て行かなければ生きる道がないという状況でしたからね。それで大日向村（長野県南佐久郡）でも村を半分に分けて半分は外へ行くことになった。ところが、軍部がそれを利用して満州（中国の東北地方）侵略の先兵に農民を送るといふ政策を取って、ちようどそれと一緒になっちゃったのでよくなかったですけれども、農民自身はどこかへ新天地を求めて開拓しようという意欲があった。それは純粋なものだったと思うんですがね。

和田には、加藤完治のような「天皇制農本主義者」のもつ思想の侵略性を看破するだけの識見がなかったにもかかわらず、農村の次・三男問題の解決のために、移民という政治性のたかい国策に文学的にコミットした自己の立場を「政治的たらざるを得ない」としたところから、加藤が結託した軍部に利用される結果を招く原因があったの

である。ここで農民の開拓意欲の「純粹」さを強調することは、それによってみずからの「純粹」さをも保証し、開拓農民ともども自分をも被害者にしたてあげ、作家的責任を解除しようとするものである。「軍部が」「利用した」というのは泣き言であって、むしろ、みずから作家としての不明と無力を承認したのも同然であり、自己の文学的過失の弁解にはなっていないし、またこのような弁解をなすべきではあるまい。そういうことになった理由は、すでにしばしば指摘したように、かれの文学の質にかかわる方法と、それをささえる思想にあったのである。「時代」の本質や方向をみぬげないまま、皮相な「時代性」に足をすくわれたことへのきびしい反省は、最近のこの談話にもみいだすことができない。まして八月十五日の敗戦前に関東軍におきざりにされた開拓村の農民、とくに少年・婦女たちの凄惨目をおおわせる混乱とその後ろに容赦なくおそいかかった七万八千をこえる死の運命^{③⑤}について、戦後、和田も耳にしなかったはずはないのだが、そのことについては口をつぐんで、ついにひと言も語っていない^{③⑥}。ここには和田伝という作家の、巧妙な自己韜晦の姿勢をみることができるといえる。かれもまた文学における戦争責任を問われねばならぬひとりである。

③⑤ 「大地の声をさぐる文学」〔毎日新聞〕昭和五十一年九月七日・夕刊

③⑥ 上笙一郎『満蒙開拓青少年義勇軍』（中公新書）、後藤藏人『満州 修羅の群れ』（太平出版社）などに詳しい。

③⑦ 水上勉は「わが六道の闇夜」で京都府の職業課の雇になって開拓農民勧誘の事務にたずさわった当時を回想したあと「この少年たちがたどった末路は、文章にもできないほどの哀切きわまりない最期であった。生還した者がほとんどいない、といってもよいほどの悲劇であった」（中央公論社『水上勉全集』12、三五七頁）と言及している。